

部活動における組織的な問題解決の支援とその評価

——宮城教育大学硬式野球部における実践的研究——

*田幡 憲一・**榊 良輔

Support for problem solving system of a baseball team of Miyagi University of Education and its evaluation.

TABATA Kenichi and SAKAKI Ryosuke

要 旨

宮城教育大学野球部の、問題解決を自立的に行う集団づくりを目指す活動の支援を行った。

内容は、(1) 部内組織の明確化とミーティングの組織化、(2) スカウティング班の設置と戦力分析資料の作成、(3) 学生課と連携した広告資料の作成、(4) 省察のためのプレゼンテーション大会の開催とレポートの作成である。

アンケートと適宜行った部員等へのインタビューを基に、これらの支援の評価を行った。その結果、ミーティングの組織化によって論点がずれずに議論ができるようになった、プレゼンテーション大会によって今後すべきことが明確になった、など肯定的な評価が得られた。小・中・高等学校等でのクラブ活動や部活動を指導する教員を輩出する教員養成大学の部活動の在り方として、大学で自ら自発的・自治的に問題解決を行う部活動を体験することは重要なことであると考えられる。

Key words： 問題解決、部活動、クラブ活動、野球部、自治

1. はじめに

大学での部活動は、教育課程外に位置づけられる学生の自発的・自治的な活動である。

本学の学生生活ガイドブック（宮城教育大学、2013a）には、課外活動について「正課以外の活動という一般的意味以上に、大きな比重を占めている分野」とし、自主性を涵養するために大切な活動という趣旨の説明がなされている。

この活動を支えるために本学では、野球場やグラウンド、テニスコート、プール、サークル棟などの施設の整備に加え、学生課職員や学生生活委員会、顧問教員などの人的な資源を投入している。これまでに、

日常の部活動の支援に加え、体育系サークルリーダー研修会や東北地区大学総合体育大会の開催には教職員が多大な支援をしてきたが、本学が部活動支援にかかるコストは決して小さくない。

平成25年度には、本学学部学生のうち1333名が課外活動を行う学生の単位である「サークル」の構成員として学生課に登録している（宮城教育大学、2013a）。平成25年5月現在の本学学部学生の在籍者数は1518名であり、複数のサークルに所属し重複して登録されている学生がいることを考えても、学生にとっても本学の学部教育にとっても課外活動が重要な要素であることは間違いない。

本学は教員養成の単科大学である。一般大学と比べ

* 宮城教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

** 宮城教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（現 宮城県水産高等学校）

て、小、中、高等学校でクラブ活動や部活動を指導する資質を涵養することも、大学として必要なことである。

昭和22年に発行された学習指導要領一般編（試案）（文部省、1947）で小学校、中学校の教科課程に自由研究を位置づけた。その中で、自由研究について「児童の個性の赴くところに従って、それを伸ばして行くことに、この時間を用いて行きたい」としている。戦後日本の学校教育における部活動、クラブ活動の原点である。その後の学習指導要領における部活動やクラブ活動の位置づけは、指導する教員からの超過勤務手当要求や事故時の責任に関する判例など、社会的情勢の中で揺れ動き、必ずしも一貫性はない（神谷、2007年度）。特に平成10年発行の中学校学習指導要領（文部省、1998）及び平成11年発行の高等学校学習指導要領（文部省、1999）では、クラブ活動や部活動に関する記述が無くなった。現行の中学校学習指導要領（文部科学省、2008）、高等学校学習指導要領（文部科学省、2009）では部活動に関する文言が復活し、教育課程上での位置づけは不明確ながら、総則に「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること。」と記されている。

学習指導要領上での位置づけの混乱とは関わりなく、多くの中・高等学校の生徒が部活動に情熱を傾けることは事実であり、多大な教育的な効果も期待できる。

中等教育における部活動について、過去の中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領はクラブ活動またはクラブ活動を含む特別活動を「自発的・自治的な活動」と繰り返し位置づけている（文部省、1977：文部省、1978：文部省、1989 a：文部省、1989b）。また、城丸と水内は、部活動を授業の一環として行うことを「自治的な活動としての把握の薄弱」としながらも、「部活動においては、教職員集団の援助・指導も受けながら、部の運営における生徒自治（＝クラブ集団の管理・運営における民主主義）の訓練がなされて当然です。」としている（城丸章夫・水内宏、1991）。

わたしたちもまた、学校教育における部活動は「自発的・自治的」な活動であるべきであると考ええる。

本研究では、学生自身が自発的・自治的な活動の中で成長するとともに、生徒の自発的・自治的な活動を

指導する教員としての資質を涵養する部活動支援を企図した。即ち、「自立した個人の協働による問題解決を行う部活動」を企図した支援である。このような部活動をここでは、問題解決型部活動（榊良輔、2013）と呼ぶことにする。

2. 研究方法

（1）方法の概略・・・エスノグラフィ

宮城教育大学硬式野球部（以下宮教大硬式野球部）の活動に共同研究者のうちの1名である榊が支援者として参加しつつ、問題解決型部活動の支援の方法を研究した。

榊は、平成19年度から平成22年度にかけて宮城教育大学教育学部の学生であったが、そのおりに宮教大硬式野球部に所属していた。その経験と、野球部員との信頼関係を基に、平成23年度と平成24年度を通じて、宮教大硬式野球部が自立した問題解決を行うことを目指した支援を行ったものである。特に平成24年度の仙台六大学野球秋期リーグ戦には、コーチとして公式戦のベンチに入りつつ支援を行った。

本研究は、これらの活動に参加・支援を行いつつ、その成果を観察し評価する、エスノグラフィ（参加観察）の手法を用いて進めたものである。

主な支援の内容は、①ミーティングの組織化、②組織的な戦力分析、③問題解決に至る練習計画の発表と記録の作成であり、即ち協働して問題解決するシステムを作成することである。その他、外部コーチと宮教大硬式野球部員との調整、ゲーム分析、技術指導やノックなどの練習補助、学生課と連携した全学応援の企画、OB会との連携、中学生のための野球大会の運営、高等学校野球部との合同練習の支援などを行った。

（2）ミーティングの組織化

1）宮教大硬式野球部組織図の作成

部員の役割分担を明確化して、ミーティングを組織化するなど部活動運営の効率化のために、新チームが発足した2012年6月に「宮城教育大学硬式野球部組織図（2012～）」（図1）を榊や顧問教員である神谷の助言を得て部員が作成した。チームの目標を達成するための指針や具体的な戦略、部員の役割などを模式的に表したグランドデザインともいえるものである。

宮城教育大学 硬式野球部 組織図(2012～)

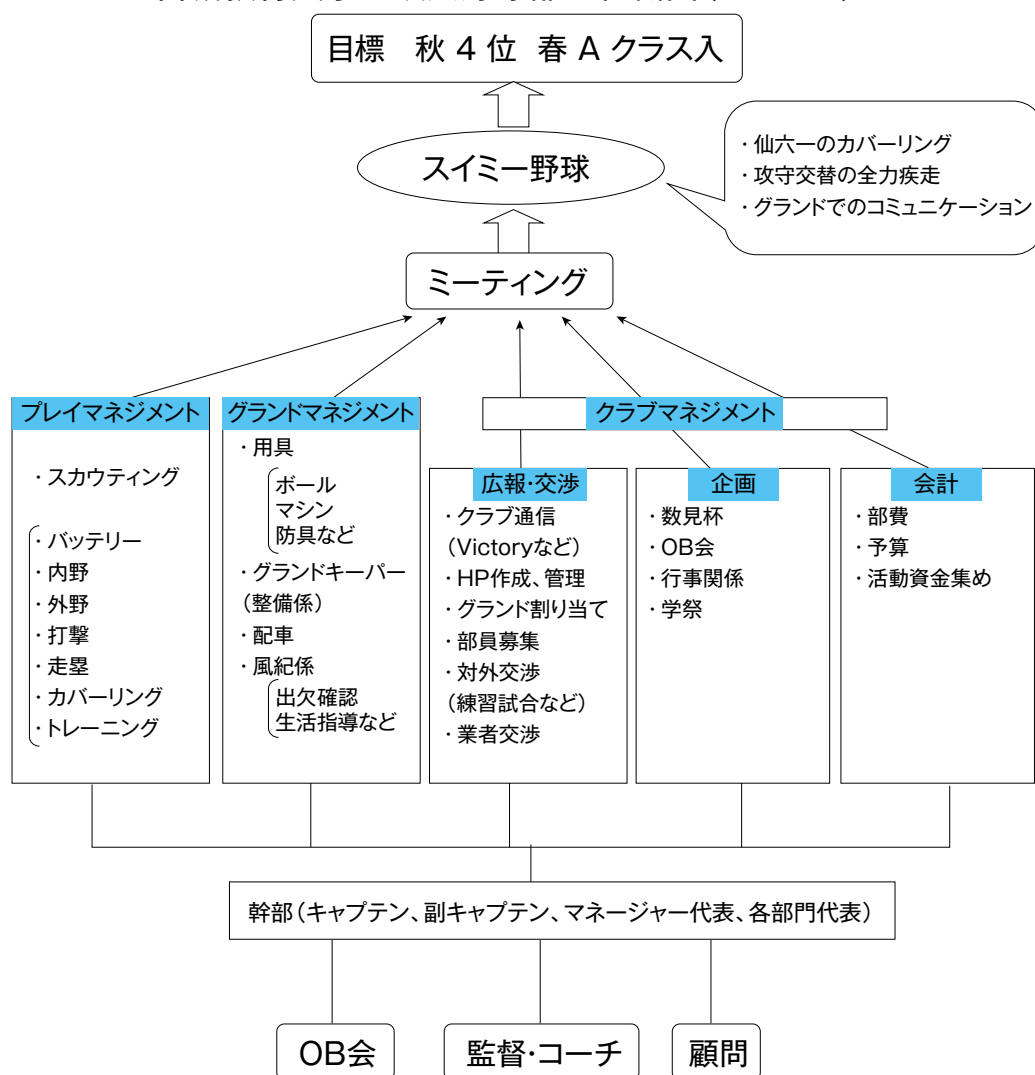


図1 作成した宮教大硬式野球部の組織図

「スイミー野球」と表現した、カバーリング、全力疾走、コミュニケーションを主軸とした戦略で、2012年度秋期リーグには4位、春期リーグにはAクラス（3位以内）を目指そうというもの。達成のための任務とその分担を示した。

これまでの宮教大硬式野球部も、新チーム発足時にミーティングを行い、目標や戦略を話し合っていたものの、組織された議論や明確な指針の提示が十分に行われず、部員の役割を示すものもなく、主将になった部員が指針や活動の計画、対外交渉など多くの役割を担っていた。したがって、部員一人一人が部活動の運営に関与をする場面がないため、主将になった部員は部の運営の負担が大きくプレーに集中できないなどの困難が生じていた。

そこで仙台六大学野球春期リーグ戦終了後の2012年6月からの新チームでは、部長（顧問教員）と主将、副主将2名（以下トップマネジメントチーム）で目標

や指針、役割などの原案を作成し、ミーティングにおいて部員たちの承認を得るという形式をとるよう、榊が支援した。原案の作成段階のうちに十分に議論することで、トップマネジメントチーム内での部活動運営の共通理解が生まれる。

また概念を視覚化した組織図の作成・提示はミーティングで部員が部活動運営について考える手がかりになった。

2) ミーティング資料の作成と提出

榊の助言を契機に、各月の定例ミーティングや重要事項の話し合いの際には、ミーティング資料を提示す

夏の大会宿2012 in田尻町

暑い季節になってきました。レポートや期末テストに追われて大変な時期ですね。1年生は初めての単位取得にさぞ不安なことでしょう。4年生は教員採用試験いよいよ大詰めですね。体に気をつけて頑張ってください!!

さて、かねてから計画していた夏の合宿についてです。プランがおおよそ固まってきたので、現段階での行程を皆さんに紹介します。

<目的>

- ・大学の球場では、4部合同利用という制約や設備の悪さから思うような練習が出来ないので、泊まり込みで一日中思う存分野球をする。
- ・リーグ戦を前に、野球だけでなくともに生活をする事でお互いを理解し合い、信頼感を深める。
- ・高校との活動を通じて、教育大学としての使命を担う。
- ・計画的な合宿を送ることで、自らが教員になった際のノウハウにつなげる。

<日時>

8月9,10,11日(木、金、土)の二泊三日。

<場所>

佐沼高棋グラウンド、大崎市田尻総合体育館グラウンド、日マン館(宿泊施設)。

〈おおよその行程〉※あくまでプランです。

8月9日(田G)

9:00 集合・出発。
移動。
11:00 昼飯(各軍ごと?)
11:30 到着。
12:00 練習。
..
18:00 上がり。
19:00 飯・風呂。
自由時間。
22:00 ミーティング。
23:00 素振り・シャドー。
就寝。

8月10日(田G)

7:00 起床、散歩。
7:30 朝食、着替え。
8:15 移動。
8:30 アップ。
9:00 練習開始。
12:00 昼食・休憩。
(仕出し弁当)。
13:30 練習再開。
(合同練習?)。
18:00 上がり。
19:00 飯・風呂。
自由時間。
...

8月11日(佐G)

6:30 起床、散歩。
7:00 朝食着替え。
7:45 移動。
8:30 アップ。
9:45 紅白戦開始。
12:30 ゲームセット。
ミーティング。
移動・昼飯。
..
16:30 学校到着。
..
..

<参加費>

11000円。

(宿泊費:3000円×2、朝食、夕食:1800円×2、交通費1000円、仕出し弁当800円)。

<持ち物>

いろいろ。

図2 トップマネジメントチームがミーティングに提出した、2012年夏の合宿計画の原案。

るようになった(図2)。定例ミーティングではトップマネジメントグループが作成した各月のスケジュール原案を提示し、全体での話し合いの結果、決定を下すようにした。

3) ミーティングでの役割分担の明確化

新チーム発足前のミーティングでは、議長や発案者、書記などの役割を主将が一人で担うケースが多かった。書記を別に設定した場合でも、議論の方向性が定まらないことも多く、議論した内容が適切に板書に表現するのが難しいことが多かった(図3)。また主将一人が

担う役割が多すぎるため、議論が組織化されず意見が反映されにくかった。主将にかかる負担が大きいため、議案などの資料の準備が間に合わずミーティングの開催が延びることもしばしばあった。

そこでトップマネジメントグループでミーティングでの役割分担を行うことにした。これまで議長も書記も兼任していた主将をミーティングの発議者とし、事前に原案を作成することにした。また議長と書記をそれぞれ設置し、ミーティング開始前までに、ミーティングのプログラムと時間割を板書で提示するようにした(図4)。

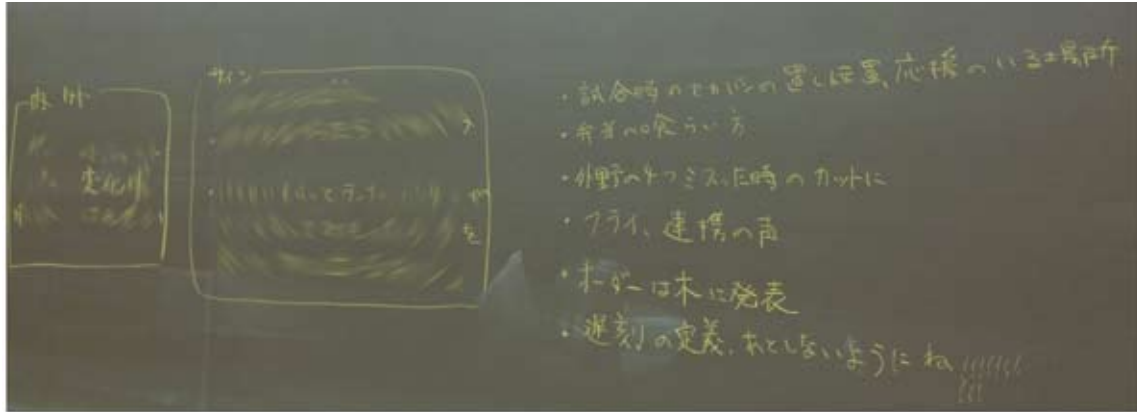


図3 2012年2月のミーティングにおける板書。左半分はサインの確認に関する記述だったので、ボカシの処理を入れた。

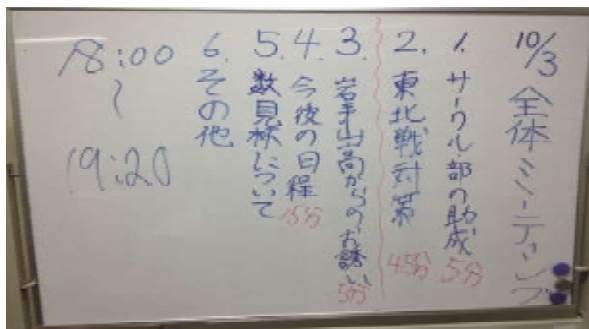


図4 2012年7月のミーティング開始前に準備された板書。話合いのテーマや配分時間が予め記入された、組織的なミーティングであることがわかる。

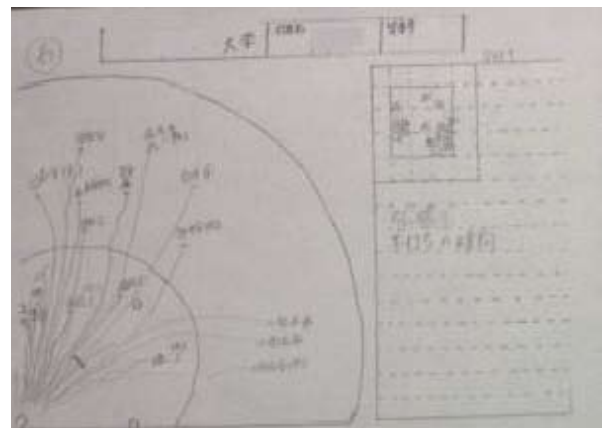


図5 打撃傾向分布表

（3）スカウティング班の設置と戦力分析用資料の作成

野球における試合のゲームプランや練習計画の立案をするには、彼我の戦力を分析し、把握しておく必要がある。榊は宮教大野球部内にスカウティング班を設置することを提案し、スカウティング班を中心に戦力分析をした。

スカウティング班の役割は、①試合のビデオ、配球や打撃傾向などの記録を、部員を球場の然るべき場所に配置して作成させること、②得られた記録を整理して資料を作成しミーティングに提出すること、である。スカウティング班の負担を軽くすることと、チーム全体で戦力分析をするという意識付けを企図したのである。

作成した資料をもとに対策ミーティングを開催し、部員全体で情報を共有した上で対策や徹底事項を決定していった。

図5は相手チームの打者がどのような投球（コースと球種）に対してバットスイングし、どのような打撃結果になったのか（ヒット、ゴロ、フライなど）が、

グラウンドの図に表現され、視覚的に分かりやすいように集計・編集したものである。これを打撃傾向分布表とした。

（4）学生課と連携した全学応援の広告資料

平成24年度仙台六大学野球春季・秋季リーグ戦最終節、宮城教育大学と東北大学の対戦で、宮教大硬式野球部は学生課と連携して全学応援を企画した。全学応援は学生と学生課で連携して学校を盛り上げる手立ての一つとして、5年前から東北大学との対戦の際に行われている。実際に全学の学生に何らかの義務を課すわけではなく、あくまで自由参加である。これまでは学生課が2号館玄関前での掲示を通じて全学への情宣を行っていた。平成24年度は宮教大硬式野球部が主体的に行った。

図6は平成24年度、宮教大野球部の活動の広報や野球競技の振興などを兼ねて、広告を作成し学内や球場で配布した資料である。

平成24年5月26日(土)・27日(日)

宮城教育大 VS 東北大

激突! 国立ダービー!!

●これまでの戦い
過去五年間の戦績は、9勝13敗と宮教大が4つ負け越している。東北大は旧卒大・知的エリート集団だが、それを凌駕する知的戦略とチームワークで撃破し、今季は5位に躍り咲く。

●戦力分析

	チーム打率 (今季)	総得点 (今季)	平均失点 (今季)
宮教大	. 157	10点	9. 3点 / 1試合
東北大	. 168	5点	7. 1点 / 1試合

●宮教の知的戦略

①攻撃編

低い打率をカバーする2つのポイント

①かき回す走塁

全員でビデオをチェックし、相手ピッチャーの癖やキャッチャーの肩の強さなどを確認している。そのため大きなリードでピッチャーにプレッシャーを与え、積極的に走ることができる。
4年・米山や3年・齋藤を中心としたセンス(状況判断能力、コーナリング、スピード)が光る走塁にも期待。

②攻めの采配

球種・配球のデータをもとに、攻撃的に作戦を仕掛けていく。4年の渋谷・瀧谷などの代打陣の一躍にも期待。
またミーティングでの反省を生かし、フリー打撃でバントやヒットエンドランの練習を多く取り入れたり、ケース打撃を増やしたりして、多彩な攻撃バリエーションの精度向上を図った。

ダイヤモンドをかけ巡り、果敢にホームを狙う!!

②守備編

失点を減らす2つのポイント

①連動するプレー

四死球が多く憂鬱だった投球を改善し、ストライク先行のピッチングをしていく。データに基づく打者の弱点をつく投球とポジションニングで、打者が打ったところに野手がいる状況を作り出す。
声かけや牽制、盗塁阻止、ダブルプレー、バントプレスなど攻めの守備を展開する。

②投手のバリエーション

悪い流れを断ち切れずに相手打線に捕まり、失点を重ねるパターンが多かった。そこで、タイムで「間」を取る工夫や積極的な投手起用がミーティングで提案された。
バラエティに富む投手陣を、事前の話し合いやゲーム内の判断によって巧みに起用し、的を絞らせない。

全員の力をあわせた攻めの守備!!

文責 藤 田(宮城教育大学 2年)

図6 仙台六大学野球リーグ戦の対東北大学戦に学生の応援を誘うチラシ。枠が作成し、学生課を通じて学内掲示、配布を行った。

(5) プレゼンテーション大会レポート

シーズン終了後の平成25年1月16日には、次の課題解決への計画(冬のトレーニングのメニュー)を発表するプレゼンテーション大会を行った。宮教大野球部では冬季練習の際、チームをポジション別のグループにわけて、さらに2人組みのバディを構成し、2人単位で練習することになっている。今回のプレゼンテーション大会では、バディを単位として発表したが、複数の

バディで1件の発表とした場合もある。

平成25年1月16日に宮城教育大学附属図書館で実施したプレゼンテーション大会には28人が集まり、それぞれ5分間の持ち時間で8件の発表が行われた。

平成24年度の大学への硬式野球部員としての登録は47名(選手、マネジャー)であり、うち10名は4年生であった。4年生はプレゼンテーション大会開催時には引退していたため、参加対象者は37名である。4年

生を除いて76%の参加率であった。

(6) 評価・・・アンケートとインタビュー調査

平成25年1月16日のプレゼンテーション大会の際に参集した28名（選手、マネジャーを含む）に対して、本研究についての質問紙を配布し、全員から回収した。内容は上記の研究手法が有効だったか否かについて理由を付して自由記述で回答するものであった。

また、参加観察を行う中で適宜、直接部員にインタビューを行ったものについても本研究における評価の資料とした。

3. 活動の評価

(1) ミーティングの組織化について

アンケートの「ミーティング組織化の支援は、部の活動を改善する上で有効だったか。」という問には、28名中27名から肯定的な回答が得られた。「内容がわかりやすく、時間が短縮された」や「役割がはっきりしていて進捗がスムーズだった」といった記述が見られた。また、部員からのインタビューでは「論点がずれてしまうことで、発言があらこちに無秩序に聞こえてくるのが、以前と比べて少なくなった。」との声も聴かれた。これまで整理されていなかった板書に項立てが加わり、板書が構造化された。ミーティング終了後に板書を写真に収めて記録として残しておく部員が現れるようになった。

議論の内容が板書に整理されていくので、ノートに記録する際も板書を軸に記録することができ、ミーティング議事録が作成できるようになった。また、ミーティングに資料が提出されるようになった。これらの結果、アンケートの回答には「参加していなくても内容や今後の予定が把握できて良かった。」や「板書や資料は形として残るので良い。」「ミーティングで話すべきことが分かりやすくなった。」といった記述が見られ、ミーティング欠席者が内容を確認でき、活動の蓄積として次につながる資料となったと考えている。

(2) 戦力の分析と戦術の徹底

スカウティング班による対策ミーティングの運営により、秋季リーグ戦では選手全員が戦力分析に携わることができるようになった。通常の観戦と異なる、戦

力分析資料の作成のためにデータを記録しながらの観戦により、新たな気づきの場面を設定することができた。

収集したデータをもとに全員で作成した戦力分析資料は、選手全員で情報を共有し、対策ミーティングや試合中に選手間で戦略を話し合う上での有効な材料となった。それらの話し合いで考案した戦略や戦術を書きだした資料を、試合中のダッグアウトに掲示するなどの工夫も行われた。

アンケートの「スカウティング班とともに作成した相手チームの打撃傾向分布表は、対策を立てる上で有効だったか?」という問に、28名中23名が肯定的に、3名が否定的に回答した。無回答は2名だった。「データ通りに打球が来ていた」や「ポジショニングを確認するうえで大変参考になった」という回答が寄せられるなど、試合をする上で有効に作用したと部員は評価していると考えられる。

(4) 学生課と連携した全学応援の広告資料

アンケートの「全学応援の広告資料作成は有効だったか」という問には、28名中24名が肯定的な、4名が否定的な回答を寄せた。

肯定的な意見には、「モチベーションがあがった。」「硬式野球部の活動を知ってもらえたことができた。」「学校生活でも話題になった。」「観客が多かった」という趣旨の回答が多かった。一方、否定的な意見はすべて「観客の増加に役立たなかった」という趣旨であった。

観客数の変化や、広告を見て観戦に足を運んだ者の人数などの調査は行っていないので、観客数への影響については不明である。自由記述欄に観客数が「増えた」と記した者が7名、「変化がない」と記した者が5名である。部員から見て、観客数にこれまでと明確な差はなかったということである。

一方、観客数の増減とは関係なく、活動を知ってもらうこと自体に価値を感じた者や、硬式野球部の活動が知られることによりモチベーションが上がることに価値を感じた者も少なくない。活動を促す要素になったということである。

現在、宮城教育大学の部活動を紹介するまとまったものは、自主的に作成しているウェブサイトを除けば、宮城教育大学のウェブサイト「宮城教育大学 サークル一覧」(宮城教育大学、2013b)に、1ページずつ掲載さ

れているものと、それを学生生活ガイドブックに転載したもののみである。試合に観客を動員する習慣の無い宮城教育大学の運動部活動が、活動を知らせる情報の発信によって、お互いに刺激しあうことができれば、対外試合の勝敗に関係なく活動を活性化することができると考えている。

(5) プレゼンテーション大会レポートと部誌への掲載

「冬メニューのプレゼンテーション大会は有意義だったか」という問いに、25名が肯定的に、2名が否定的に回答した。無回答は1名だけだった。

「(ポジションで分けた) グループ内の団結とグループ間の対抗心が生まれた」や「周りに発表することで練習に責任感が出た」などの回答が得られた。また、「目標が明確になった」、「モチベーションが上がった」などの趣旨の回答も各4名から得られた。自発的・自治的な活動を充実させるのに、効果のある活動であったと考える。

プレゼンテーション大会でのレポートを活動報告のひとつとして、平成24年度の宮城教育大学硬式野球部部誌「Victory」(年に一回発行)の定例のページに追加して掲載した(宮城教育大学硬式野球部 2013)。「冬メニューの内容をレポートにしてまとめたのは有意義だったか」という問いに、23名が肯定的に、3名が否定的に回答した。無回答は2名であった。肯定的な回答の中では「やる事が明確になるとともに、計画に練習できる」や「振り返りという意味で、何ができたか、何が足りなかったかがわかる」など、すべきことが明確に示せたということ(8名)、「文書にして記すことで責任が伴った」など、冬メニューを実行せざるを得ない状況に追い込まれたこと(3名)などが記されていた。否定的な回答は、「プレゼンテーションを行ったので必要性を感じない。」、「周りには興味がない。」などであった。

発表し、議論し、記録することは、自発的・自治的に考え協働して問題解決を行う部活動、即ち問題解決型部活動を運営する上で、不可欠な技術である。バディを単位として考え、ポジションごとのグループを単位としたプレゼンテーションでの発表をもとに議論を行い、さらにその内容をまとめて部誌に記録するという、一連の活動を支援することができ、部員からの一定の評価を得ることができたことは、宮教大硬式野球部の

運営に寄与することができたと考える。

4. おわりに

集団の目標を設定しその追究のために組織を整え自治的に運営していくことは、社会的な問題を解決していくための技術であり、学校教育においても培われるべき素養である。問題解決型部活動はそのような問題解決のプロセスや方法を実践的に学習する場になり得るものである。

仙台六大学野球平成24年度秋季リーグでは宮教大硬式野球部は勝利を得られなかったが、部員から「役割が認識できた」や「進行がスムーズだった」という意見が得られ、「今までよりも『次』につながりを感じるものになった」という評価を得た。本研究で行ったミーティングの組織化や、戦力分析の支援により、協働して問題解決をする意識を育むことができたのだろう。

ミーティングの組織化や、戦力分析の結果、チームの課題と目標までのプロセスを明らかにして、適切に練習計画を立てて問題解決を繰り返し、試合で成果を発揮するサイクルを形成できたと考えている。部活動を指導する教員を輩出する教員養成大学の部活動の在り方として、大学で自発的・自治的に問題解決を行う部活動を体験することは重要なことである。

一方、勝利が、集団の構成員による、自発的・自治的な問題解決の原動力となるよう環境を整える指導者の役割を、検討することはできなかった。勝利至上主義は、教師主導の封建的組織運営による非科学的練習や体罰を引き起こすこともあり、勝利の取り扱いについては今後の課題として残したい。

部活動は現行の中学校学習指導要領(文部科学省、2008)や高等学校学習指導要領(文部科学省、2009)では総則に記されているものの、教育課程上の位置づけは明確ではない。一方、小学校から高等学校を通じて、学習指導要領の総合的な学習の時間の目的には、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」と記されている。私たちの目指している問題解決型部活動

と同じ方向を目指すものである。問題解決型部活動がスタンダードとなれば、学校教育の教育課程において総合的な学習の時間として位置づけることもあり得よう。

宮教大硬式野球部員には教員を目指す者も多い。中等教育における部活動の事実上の重みを考えるとき、教員養成の教育課程に部活動指導に関する科目を本来位置づけるべきであると考ええる。今後、教員養成教育における部活動の位置づけについて、学生、教員ともに盛んに議論していくべきことである。

文部省、(1998)、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局
文部省、(1999)、高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局
榊良輔、(2013)、問題解決型部活動のマネジメントとカリキュラムの開発、平成24年度教職大学院リサーチペーパー、pp.26-27 (宮城教育大学教職大学院発行)
城丸章夫・水内宏、(1991)、スポーツ部活はいま、青木書店

(平成25年 9 月30日受理)

謝辞

教職大学院における榊の副指導教員として、また宮城教育大学硬式野球部顧問として本研究に多大な支援をいただいた神谷拓氏に感謝する。宮城教育大学硬式野球部員諸君及びコーチの諸氏には、私たちの研究に協力いただいたことに感謝する。角晃司氏（仙台南高等学校教諭）と佐藤隆司氏（仙台南高等学校教諭）には、高等学校の硬式野球部指導の実践をご教示いただいたことに感謝する。

文献

神谷拓、(2007年度)、戦後わが国における「教育的運動部活」論に関する研究、筑波大学学位（博士）請求論文
宮城教育大学、(2013a)、学生生活ガイドブック、宮城教育大学
宮城教育大学、(2013b)、「宮城教育大学 サークル一覧」、
http://www.miyakyo-u.ac.jp/student_life/circle/index.html (2013年 7 月18日閲覧)
宮城教育大学硬式野球部、(2013)、VICTORY (平成24年度)、pp.41-59、宮城教育大学硬式野球部
文部科学省、(2008)、中学校学習指導要領、株式会社東山書房
文部科学省、(2009)、高等学校学習指導要領、株式会社東山書房
文部省、(1947)、学習指導要領一般編（試案）、日本書籍株式会社
文部省、(1977)、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局
文部省、(1978)、高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局
文部省、(1989 a)、中学校学習指導要領、大蔵省印刷局
文部省、(1989b)、高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局